

ふみくら

No. 73

2005. 12. 15

早稲田大学図書館報



於鹿鳴館貴婦人慈善会之図 橋本周延画

《目 次》

電子ジャーナル・データベース導入にかかる私立大学図書館 コンソーシアム(PULC)の形成とその活動について・・・2	
中元 誠(総務課長)	
DSpace@Waseda Universityについて・・・・・・・6	
今村 昭一(学術情報課)・荘司 雅之(学術情報課長)	
古典籍データベース化事業開始・・・・・・・8	
松下 真也(調査役)	
歓迎されるプランゲ雑誌マイクロフィッシュ・・・・9	
山本 武利(政治経済学部教授)	
海外におけるフランス語学研究論文目録づくり・・・10	
会津 洋(名誉教授)	
西洋社会科学古典資料講習会に参加して・・・・・・・11	
本木 洋子(資料管理課)	

中国語図書WINEデータ入力 of 現状・・・・・・・12	
高木 理久夫(資料管理課)	
2005年度 中央図書館オリエンテーション報告・・・14	
オリエンテーション部会	
2005年度3—11月 展覧会開催報告・・・・・・・15	
展示部会	
最近の整理資料から・・・・・・・16	
特別資料室	
新収資料「新撰組隊士召喚状」について・・・・・・・18	
高木 理久夫(資料管理課)	
図書館だより・・・・・・・20	

電子ジャーナル・データベース導入にかかる 私立大学図書館コンソーシアム(PULC)の形成とその活動について

中元 誠(総務課長)

1. はじめに

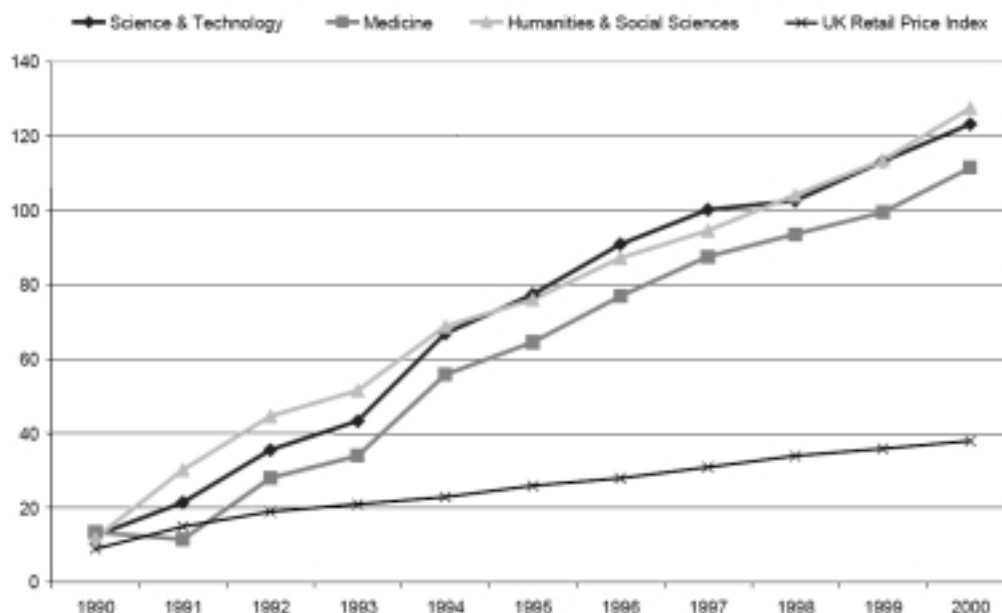
永遠に拡大を続ける学術情報をいかにして必要かつ適切に利用者に提供するかは大学図書館がつねに直面し続ける課題である。とりわけ、刻々と生産される学術情報を迅速かつ一定の質を確保しながら提供する媒体である学術雑誌の価格の動向と大学図書館が必要とするこれら学術雑誌を購読するための予算との関係は、1990年代にはいと大学図書館の存立を脅かしかねない課題としておおきくクローズアップされることとなった。後年、「シリアルズ・クライシス」とよばれることとなったこの問題は、我が国においては外国雑誌価格の高騰というかたちで機関購読のほとんどを占める大学図書館を悩ませ続けることとなった。統計によると1990年から2000年にかけて科学技術分野の学術雑誌の平均価格上昇率は178%、また、医学分野においては184%という数値が示されている。先進国における同時期の平均小売物価の上昇率がおおむね30%前後であったことを考えるといかに学

術雑誌の価格が高騰したかは明らかであろう。近年、こうした傾向は若干の落ち着きを示しているようにみえるが、1999年から2003年にかけてScience Citation Indexに採録された学術雑誌価格の平均上昇率は依然として40%という高い数値を示している。

こうした学術雑誌の価格高騰の背景には、急激に量的な拡大をつづける学術情報の存在が指摘されるが、これに加えて1990年代にはいとインターネットの登場に代表されるネットワーク環境の整備に対応した学術情報のデジタル化、つまり学術雑誌の電子化にむけた出版社による先行的な投資が価格に転嫁されてきたとされる。本来ならば、電子化により出版コストは低減していくことは明らかであるが、学術情報の量的な拡大とコスト低減にむけた基盤的整備に一時的な価格の高騰は避けられないというのが出版社の主張であった。

さきごろ経済協力開発機構(OECD)から発表されたデジタル環境下における科学研究出版の動

雑誌価格の上昇1999年-2000年(累積年間上昇率)



Source: Blackwell's Periodical Prices. Cited by Department of Trade and Industry (2002). Publishing in the Knowledge Economy: Competitiveness analysis of the UK publishing media sector, Department of Trade and Industry, London, p37.

向に関する報告では、2003年において学術雑誌の75%がオンラインで入手可能となっているとのことである。一方で、デジタル環境下における学術雑誌の最適価格モデルについてはいまだに不透明な状況が続いているが、いずれにしても現在の価格上昇が一定のペースで継続していくと仮定すると、いずれこの市場が破綻することは想像にかたくない。

こうした状況にさらに拍車をかけたのが1990年代以降の我が国の高等教育機関における政策的な競争環境の導入である。競争環境に対応をせまられた大学においては、ほぼ例外なく新規部門の拡大と経常的予算の圧縮をはかりはじめ、大学図書館における図書購入予算も圧縮の対象となった大学は少なくない。

大学図書館としては、当面、コンソーシアムの形成などにより横の連携をはかりながら出版社との交渉においてこの価格上昇に一定の歯止めをかけながら、他方で、維持可能な最適価格モデルをこの市場（実は、学術コミュニケーションシステムそのものなのであるが）でさぐっていくという戦略をとらざるをえなくなっている。

2. 私立大学図書館コンソーシアムの形成

1999年後半に端を発したElsevier社による円価格問題、並行輸入問題は、この間、大学図書館を悩ませ続けていた、いわゆる「シリアルズ・クライシス」を象徴する事件となった。この問題にたいして、私立大学図書館協会は、2000年度よりElsevier社問題特別委員会を設置し、不当な価格設定にもとづく過払金の返還請求というかたちで同社と直接交渉をすすめることとなった。2000年12月には日本医学図書館協会、日本薬学図書館協議会とともにElsevier社による一連の不当な販売行為について独占禁止法違反の疑いを公正取引委員会に対して申し立てることとなった。

一方、国立大学図書館協議会（当時）は、この問題にたいして当初、図書館長連名による抗議声明をあきらかにするなどの対応をとっていたが、2000年度より協議会内に電子ジャーナルタスクフォースを設置し、協議会を代表してElsevier社を含めた学術出版社との統一交渉をすすめることとなった。この交渉により国立大学図書館は2000年度

より3カ年のコンソーシアム契約をElsevier社ととりかわすこととなる。また、すでに1999年度より国立大学図書館はAcademic Press社との直接交渉によりコンソーシアム契約をとりかわしており、この後、国立大学図書館は一気に図書館コンソーシアムによる電子ジャーナル導入のための組織的基盤を整備していくこととなった。

私立大学図書館協会のElsevier社問題特別委員会は、2002年よりリリースされたScienceDirectの価格体系等について、いくらかの譲歩を引き出したが、この委員会はあくまでも過払金の返還と不当な価格設定、価格体系の是正をもとめることが目的とされたため、公正取引委員会の独占禁止法違反にあたらないとした裁定（2002年7月）が示された段階で、委員会を解散することとなった。

いわゆる大学図書館における「シリアルズ・クライシス」のひとつの帰結として登場した電子ジャーナルにたいする日本の大学図書館の対応は、ここにおいて国立大学図書館と私立大学図書館とで際立った対照を示すこととなった。財政的基盤を政府におく国立大学図書館が一気にスケールメリットを発揮しうる図書館コンソーシアム形成に向かったのとは対照的に、公立および私立大学図書館はひきつづき非常に困難な図書館運営を強いられることとなった。

私立大学図書館の横の連携で、まず想起されるのは私立大学図書館協会であるが、同じ4年制私立大学といえども学部学科構成、教職員学生数などをはじめとして加盟校の規模や特質は多岐にわたり、電子ジャーナルへの対応についても加盟校の事情によってそれらの必要性、理解度に相当な温度差が存在する。また、協会運営にあたる役員校も加盟校の持ち回りによる2年任期とされ、電子ジャーナル導入をはじめとした変化の激しい大学図書館の経営環境にたいして協会として機敏な対応をとることが困難であった。さらに、すでに地域ないし医学、薬学といった単位でのコンソーシアム交渉がすすめられている事例があり、協会を枠組みとしたコンソーシアム交渉の開始を仮定すると、先行するコンソーシアム交渉との調整に多大な困難が想定された。

この間、2002年1月より、ISI社Web of Science導入、利用にかかわり、国立大学図書館協議会から

の非公式の打診をうけ、すでにISI社同製品を導入している五私立大学（慶應義塾大学、東京慈恵会医科大学、関西大学、九州産業大学、早稲田大学）により新たな枠組みによるコンソーシアム契約のための協議が開始された。ISI社との交渉の結果、同年10月に、十五の私立大学とISI社との間でコンソーシアム契約（2002年～2004年）が成立した。これを契機として、2003年7月、私立大学図書館Web of Scienceコンソーシアム発足にかかわった五つの私立大学図書館を基本として、関東地区では慶應義塾大学、東京慈恵会医科大学、早稲田大学、関西地区では関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学、九州産業大学が中心となり、全国の私立大学図書館に対して私立大学図書館コンソーシアムの設立とそこへの参加を呼びかけることとなった。呼びかけでは、コンソーシアム形成の目的として「私立大学図書館における電子ジャーナル、データベースの導入、利用にかかわり、導入、維持にかかる価格、提供、利用などの諸条件について、関連する学術出版社、販売代理店等と加盟私立大学を代表して統一的な交渉をおこなうこと」がうたわれ、70余りの私立大学図書館の参加をえて2004年度契約交渉がすすめられた（2005年12月現在の参加校数：135校）。交渉は、当初より基本的に各版元との直接交渉を原則として、呼びかけ大学図書館を中心にすすめられ、2004年度については、Oxford University Press社、Blackwell社、Wiley社について最終提案がまとめられた。また、2005年度契約交渉については、関東地区から慶應義塾大学、法政大学、明治大学、東京慈恵会医科大学、早稲田大学、関西地区から関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学からなる幹事会を組織し、必要に応じた役割分担をしながら交渉をすすめることとなり、2005年度については、Elsevier社、Springer社、Blackwell社、Wiley社、Oxford University Press社、Thomson Scientific社に加えて、SPARC** JournalであるUniBio Press、BioOneなどについても最終提案がまとめられた。とりわけElsevier社との2005年度契約交渉においては、交渉の受け皿をもたない公立大学図書館の参入を認めることで合意し、結果として公立大学3校が加わることとなった。2006年度契約交渉については、2005年11月現在、交渉を終

了した出版社は、16社、現在、交渉を継続している出版社は2社となっている。また、本年度より交渉のまとまったすべての出版社との合意について公立大学図書館の参入を認めることとした。これにより現在8校の公立大学がPULCへの参加を表明している。

今後、大学図書館における電子ジャーナルの提供は、加速度的に拡大していくことが予想される。このことは、学術コミュニケーションにおける学術雑誌のあり方にもおおきな影響をおよぼしながら、学術雑誌の価格高騰、図書館における所蔵タイトル数の減少などの問題とあわせて、ひろく大学図書館における学術研究情報基盤整備の課題となりつつある。国立大学図書館においては、一大学図書館としての対応に限界があることを共通の認識として実質的な国立大学図書館コンソーシアムの形成にむかった。上で述べた国立大学図書館協議会からの打診の背景には、枠組みを拡大することにより交渉を優位にすすめると同時に、交渉相手である学術出版社にたいして日本の大学市場を現実的、具体的に認識させることにより日本の市場が欧米に劣らず巨大な市場であることを再認識させることなどの狙いがあると推察される。こうした危機意識と現実的な対応については、大学の設置形態をこえて幅広く共有されるべきであるが、残念ながら、公立ならびに私立大学図書館をも含めた横断的な図書館コンソーシアムの形成までにはいたっていない。私立大学図書館においても、個別の大学図書館における対応はもはや限界をこえており、大学図書館間の連携をさらにすすめる必要がある。

3. 回顧と展望

これまで、私立大学図書館におけるコンソーシアムの形成とこれにかかる背景状況について事実関係を中心に概観してきたが、以下にこれらに関する私見を述べる。

2003年7月の私立大学図書館コンソーシアム形成の呼びかけの直接的な契機となったのは、2001年から開始された国立情報学研究所によるOxford University Press社電子ジャーナルパッケージの無償提供実験が2003年末で打ち切られることが通告されたためであった。当時、すでにこの実験に参

	国立大学(87校)	公立大学(80校)	私立大学(542校)	計
学部学生数	459,496	105,176	1,941,251	2,505,923
大学院学生数(修士課程)	93,062	9,193	60,457	162,712
大学院学生数(博士課程)	51,526	4,249	17,671	73,446
教員数	60,897	11,188	86,685	158,770

平成16年度学校基本調査報告書(高等教育機関編) 文部科学省

加をしていた私立大学は250校余り存在しており、国立情報学研究所からいわば、梯子をはずされることになった場合の影響を最小限に回避するためにはコンソーシアム形成による私立大学図書館の連携の枠組みを早急に模索する必要があった。

2004年度の私立大学図書館コンソーシアムの緊急かつ最優先の課題はOxford University Press社との交渉を早急にとりまとめることであった。しかし、とりまとめられた交渉の結果に参加の意思を表明した私立大学はわずか10校であった。いうまでもなく無償から有償となることが最も直接的な要因と考えられるが、背景には日本の大学における教育研究体制の実態と構造が推察される。上の表に、2004年度における4年制大学に在籍する学生、教員数を示す。

電子ジャーナルによる学術研究情報の提供は、研究情報基盤整備の最優先課題となりつつあると思われるが、周知のとおり、4年制大学に在籍する学部学生の75%以上を受け入れる私立大学において新たな研究情報基盤整備に限られた財源をふりあててはたいへんな困難を伴うことは想像にかたくない。さらに、表に示したように大学における組織的な研究活動を支える人的基盤、すなわち一義的な研究者と位置づけられる教員数とその予備軍である大学院学生数を設置形態別に比較すると、誤解を恐れずに言えば、明らかにそこには「格差」が存在する。このことを高等教育政策の歴史的文脈におきかえるならば、研究大学としての政策的整備が国立大学を主軸にすすめられたこと、一方、私立大学は、国立大学との対比において戦後のベビーブームによる大量の学部学生の受け皿として主に高等教育をうけもつ機関として整備されてきたことが推察される。これまで述べてきた電子ジャーナルの導入、利用環境の整備が

研究支援情報環境の整備の根幹であると仮定するならば、私立大学においては、国立大学とその人的基盤の違いにおいて優先度が異なったものとならざるをえない実態をうかがうことができる。

おそらく、私立大学図書館コンソーシアムは、国立大学図書館の場合とは異なり、いますぐにすべての私立大学図書館を糾合する存在とはならないであろう。さらに、一方では私立大学に限らず日本のすべての大学におけるあらゆる活動の場面での競争環境の一層の深化が想起される。電子ジャーナルの導入、利用環境の整備が、すでに述べたように研究支援情報環境整備の根幹にかかわるとするならば、そこでの優劣は研究大学間の競争に大きな影響をおよぼすこととなる。また、他方では研究大学とはまったく違った方向への大学の差別化(たとえば大学院をもたないリベラルアートのカレッジへの特化)の進展も容易に想起される。

大学図書館は歴史的に図書館間相互貸借や分担収集など互恵ないし連携と協調を前提とした相互協力の制度的枠組みを発展させてきた。しかし、このことは、うらがえせば、大学間の競争を無条件に喚起することを暗黙のうちに避けてきたといつて過言ではない。最近の大学図書館コンソーシアムの活動は、こうした図書館間の相互協力とは、まったく質を異にするものと考えべきであろう。すでに述べたように日本における大学図書館コンソーシアムは、大学間の競争と連携・協調の分岐点ともいべき危ういバランスをつねに内包していくように思われる。

*2004年4月に国立大学図書館協会と改称

** The Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition
<http://www.arl.org/sparc/>
<http://www.nii.ac.jp/sparc/>

DSpace@Waseda Universityについて

今村 昭一（学術情報課）
莊 司 雅之（学術情報課長）

1. はじめに

DSpace@Waseda Universityは、早稲田大学の学術機関リポジトリの名称です。

学術機関リポジトリについては、「早稲田大学図書館年報 2004年度」で紹介していますが、あらためて定義を述べますと「大学等の学術機関で生産された電子的な知的生産物を保存し、原則的に無償で公開することを目的として学術機関自らが構築するインターネット上の情報発信システム」（国立情報学研究所）です。

さて、学術情報の出版形態が紙を媒体としたものから電子的なものに変化してきていますが、電子的なコンテンツの長期にわたる保存には課題が多くあります。例えば、10年前のマッキントッシュで作成したワープロ文書をWindowsで読むのはたいへんです。また、CD-ROMの寿命は一般に20年程度といわれています。

以上のようなことから、図書館は、従来のように紙媒体資料のみの保存に加えて、電子的保存というものも考えなければならなくなりました。

また、大学および図書館は蓄積したコンテンツを有効に発信し、大学で行われている研究活動が外から見えるようにすることも求められています。

学術機関リポジトリは、これらの要請にこたえるものです。

2. DSpaceとは

DSpace@Waseda Universityのシステムには、マサチューセッツ工科大学（MIT）とヒューレット・パカード社が共同で開発したデジタル情報保存システムを使っています。このシステムはDSpaceと呼ばれるオープンソース・ソフトウェア¹⁾ですので、無料でダウンロードすることができます。DSpaceは、大学の知的生産物を一箇所に集め、それによって簡単に検索できるオンラインコレクションを形成しようという「スーパーアーカイブ」の発想を基にしています。

2002年の発表以来、DSpaceは32,000回以上ダウ

ンロードされ、学術分野の機関リポジトリに広く利用されています。

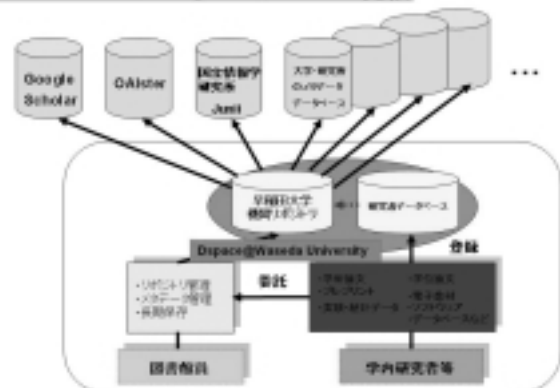
日本では、国立情報学研究所の学術機関リポジトリ構築事業²⁾を委託された19大学のうち、11大学でDSpaceが採用されています。（一部予定を含む）

DSpaceのユーザ・コミュニティは活発に改良・開発を行っているので、バージョンアップごとに新機能が追加され、より使いやすいものに進化しています。また、HANDLE SYSTEM³⁾を採用していることにより、サーバ名が変更になったり、DSpaceからほかのソフトウェアに移行したとしても電子的な学術情報へのアクセスを保証しています。

DSpaceに収載された学術情報は、インターネットを通じて誰でもどこからでもアクセスすることが可能です。また、DSpaceはOAI-PMH⁴⁾にも対応しています。NIIメタデータ・データベースやGoogle ScholarなどがOAI-PMHに準拠しているため、それらとDSpaceの間でメタデータ⁵⁾のやりとりが可能です。こうしたメタデータ・データベースや検索エンジンからメタデータを検索することができるため、DSpace@Waseda Universityを直接意識することなく、大学の学術情報にたどり着くことが可能です。この結果、大学の研究活動が外から見えやすくなることになり、大学の学術情報の有効的活用が期待できます。

DSpaceにより期待される効果をまとめると以下

OAI-PMHによるコンテンツの発信



のようになります。

まず、学内の先生方から見ると、ご自身の研究成果の視認性、影響力（インパクト）を向上させることができます。また、研究成果の管理・発信・保存のコストを削減することが可能です。

大学から見た場合、大学で行われている研究活動が外から見えることになり、大学としての説明責任をはたすことができます。また、学内財産である学術情報（研究成果）の散逸を防ぐことができるほか、産学連携の促進も期待できます。

そして社会から見ると、校友および一般の方々が大学の研究活動・研究成果の総体を迅速に把握することができます。

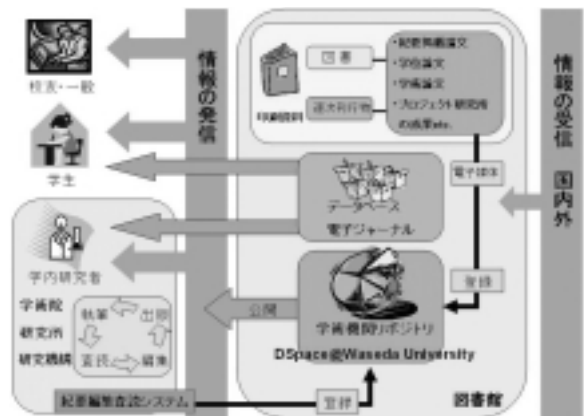
3. コンテンツについて

DSpace@Waseda Universityは学術情報を論文の単位で保存します。つまり、表紙や目次があるような冊子体のイメージとは異なったものとなります。保存される学術情報は、公開されることを前提としているため、許諾が得られたもののみを掲載することになります。

また、学内で生産された学術情報や研究成果を保存の対象としているため、その種類の範囲は幅広いものとなっています。

今後、各学術院等を代表する紀要について、創刊号からの掲載論文を遡及して電子化し、DSpace@Waseda Universityに保存し、公開することを計画しているほか、プロジェクト研究所、COEおよびSuper COEなどの成果についても積極的にDSpace@Waseda Universityに搭載していきたいと考えています。

そして、研究推進部、メディアネットワークセンターと協力して、先生方が研究者データベースを使い、直接、ご自身の知的生産物・研究成果等をDSpace@Waseda Universityに登録できる仕組みを実現させること、学内紀要の査読システムや電子出版により電子的に発表された論文をDSpace@Waseda Universityに登録することなどを検討しています。



学術機関リポジトリの概念図

- 1) インターネットなどを通じてソースコードを無償で公開された、誰でも改良、再配布が可能なソフトウェア。
参照：”IT用語辞典 e-Words”<<http://e-words.jp/>>
- 2) 最先端学術情報基盤（CSI）の構築推進のため、大学等学術研究機関との連携および支援を目的とする国立情報学研究所の委託事業。
- 3) リポジトリに保存された学術情報が、長期間にわたリアクセスが有効となるよう、永続的識別子として CNRI（Corporation for National Research Initiatives）のHANDLE SYSTEMを採用している。
参照：”HANDLE SYSTEM” <<http://www.handle.net/>>
- 4) Open Archive Initiative – Protocol for Metadata Harvestingの略。OAI(Open Archives Initiative)が定めた、サーバ間でメタデータを機械的に収集するための、要求と結果を授受するためのプロトコル。
- 5) ウェブ上の情報資源に関する目録情報。ダブリン・コア（Dublin Core）によるメタデータ形式が標準的なものとされており、Dublin Core Metadata Initiative（DCMI）という国際組織がその規格を維持・管理している。

古典籍データベース化事業開始

松下 眞也（調査役）

前号でお知らせしたとおり、2005年4月より、早稲田大学図書館の所蔵する和漢古書・貴重書約30万冊を対象としたデータベース化事業がスタートした。館内に「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト」をたちあげ、中央図書館1階に「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室」および同作業室を設けて、書誌データ入力作業および全文画像データ作成のための撮影作業を開始した。現在、約半年を越えたところで、洋学コレクションを中心として約6,000件の書誌レコード、約20万カットの画像データが蓄積されている。洋学コレクションとしてある程度まとまったところで、公開に踏み切る予定である。すべての入力が終わってから公開するのではなく、特定分野のまとまりごとに順次公開してゆく方針である。

この事業のキーポイントは「公開」にある。周知のように、これまで、古典籍は古い貴重な資料であるがゆえに、どうしても保存が優先され、利用には一定の厳しい制限を設けざるをえなかった。しかし、どんなに貴重な資料でも、利用され、研究されなければ、本当は意味がない。古典籍は人類ののこした知的遺産であり、すべての人に活用されるべきものだからである。

古典籍の書誌レコードは、WINEの和書の入力仕様に準じ、WINEのなかに取り入れられるが、書誌データ画面をクリックすれば、ただちに鮮明なカラー撮影による全文画像に飛ぶことができる。これだけでもすでに十分画期的なことであるが、さらに画期的なことは、これらの画像がGoogleなど一般の検索エンジンを用いることにより、容易に検索できることである。すなわち、利用者は、こちらのデータベースの存在を意識することなく、古典籍の貴重な画像に接することができるようになるのである。

実はこれまでも部分的に、早稲田大学図書館が有する貴重な資料をデジタル画像化し、公開していた。西垣文庫の錦絵や引札、中国の年画コレクション、大隈重信関係資料、その他展覧会に出品

した資料などである。これらはGoogleですぐにヒットするので、日本国内はもちろん、外国からもアクセスが多く、資料についての問い合わせや利用の希望も増えていた。一例としては「授業で使いたい」という中学・高校や生涯教育の現場からの要望がふえてきたことがあげられる。この需要を背景に、より網羅的、完全な形での公開を目指しているのが本事業である。

古典籍のデータベース化は、5年計画で完遂することを目標にしている。大まかな計画は、

2005年度 洋学関連資料・自然科学分野（科学史）のデータベース化（現在進行中）

2006年度 文学・芸術および社会風俗関係資料のデータベース化

2007年度 歴史・伝記分野のデータベース化

2008年度 哲学・宗教分野のデータベース化

2009年度 社会科学分野のデータベース化

というもので、毎年それぞれ約6万冊前後、1万件以上の書誌レコード、50万カット前後の画像データを作成してゆくことになる。

自館のカード目録や冊子目録、国文学研究資料館の古典籍目録データベースなど先行する参考データなどがあるとはいえ、現物の古典籍資料一つ一つの書誌作成は難しい問題を含んでいる。また撮影においても、資料がさまざまな形状をしていること、劣化しているものが多いことなど、きわめて難事業になることが予想される。委託業者である紀伊國屋書店、東京都板橋福祉工場のスタッフとともに力をあわせて、データベースの完成を目指したい。これが完成すれば、ほとんどわが国ではじめての網羅的な古典籍データベースのモデルとなりうるし、国内・国外の古典籍を所蔵する諸機関との連携協力も視野に入ってくる。Web上で容易に古典籍のオリジナル画像を利用できるようになれば、これまでの研究・教育のスタイルを変え、あらたな視点・発想をもつ研究者の育成にもつながってゆくのではないだろうか。

歓迎されるブランゲ雑誌マイクロフィッシュ

山本 武利（政治経済学部教授）

ブランゲ文庫*は米国メリーランド大学が所蔵する占領期日本の雑誌、新聞、図書などのメディアの貴重な宝庫である。これらの紙誌の多くが日本には所蔵されていない。同大学と国立国会図書館が協力してこれらのマイクロ化という事業を行っている。このたび本館で購入された雑誌マイクロフィッシュはその数63,131枚、タイトル数13,787、推定ページ数610万にもなる膨大なものである。

メリーランド大学が販売しはじめたこのフィッシュは、全国の大学でぼつぼつ購入されているようだ。しかしその価格がきわめて高いため、フルセットで所有する機関は全国で5本の指を数えるほどである。その1つに本学が加わった。

その目録を見ると、「早稲田」の冠の付いた雑誌は『早稲田文学』をはじめ『早稲田中学講義』、『早稲田文学講義』、『早稲田式速記講義録』などの講義録、『早稲田法学』、『早稲田政治経済学雑誌』などの紀要、『Waseda sports』がある。他のところをざっと見ると、早稲田大学人文科学研究『人文科学研究』、早稲田大学学園誌刊行会『学園』、早稲田中学雑誌会『稲友』などが目に入った。もっと時間をかければ、サークルやゼミなどの雑誌もたくさん発見されるはずである。

ブランゲ文庫といえば、1945年から1949年の間、GHQが検閲目的に集めた雑誌であるため、検閲研究の資料という誤解がある。もちろん検閲研究に

は不可欠である。しかし社会科学、人文科学の分野だけでなく自然科学の分野の雑誌が収集されている。当時の水準や成果を示す雑誌が網羅されているこのフィッシュは、本学の研究全般に寄与すると思われる。

メディア史をテーマにしている私はかつて占領期を対象にした『紙芝居』**という本をまとめるときに、このマイクロフィッシュにはじめて国会図書館で接した。『紙芝居』といった雑誌は目録ですぐに分かるため利用できたが、その他の雑誌にどんな関連記事があるかは皆目見当がつかなかった。アナログ的な長年鍛えた勘もきかなかった。そこでこの資料群を活用するためには、目次のデータベースが不可欠と思い、「占領期雑誌目録データベース」作成を志した。

占領期雑誌記事情報データベース化プロジェクト委員会（代表・山本武利）を結成し、日本学術振興会の平成12～15年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を得て、このブランゲ文庫コレクションの全雑誌、全号の表紙・目次等から著者名、記事・論文タイトル名、本文小見出し、分類記号、分類項目、検閲に関する情報、巻号、発行所（出版者）、発行年月日、発行地などの情報を入力した。現在<http://www.prangedb.jp/>で無料公開している。

以下がデータベースの雑誌ジャンル別記事レコード入力数である。

占領期雑誌目録データベース記事レコード数

年度(平成)	雑誌ジャンル(タイトル数)	記事レコード数
12	政治・法律・行政(408)//経済(600)//社会・労働(371) 教育(359)	320,587 48,077
13	芸術・言語・文学(3,163) 歴史・地理(512)//哲学・宗教(230)	454,934 118,600
14	科学技術(1,724)	327,381
15	書誌・図書館学(115)//一般誌(971)//一般学術誌(19)//児童誌(508)	410,952
16	小冊子(2,000)	341,945
	合計	2,022,476

私は友人たちと数年来、国会図書館のフィッシュを使いながら、このデータベースのヒット率を高めるためのシリーズづくりを行っている。フィッシュが身近に使えるようになったため、我々の研究は飛躍的に前進するだろう。

* The Gordon W. Prange Collection kept at the University of Maryland

**『紙芝居：街角のメディア』吉川弘文館、2000年

海外におけるフランス語学研究論文目録づくり

会 津 洋（名誉教授）

かつて語学教育研究所（語研）図書室に収められていた洋雑誌は移管され現在、中央図書館3階の書棚に配架されている。昨年末の一日、私たちは関東周辺の大学の教員有志とともに日本フランス語学会の要請を受け、海外雑誌に掲載されているフランス語学論文の目録データを作成した。実は、このデータは知るひとぞ知る1967年この学会の機関誌『フランス語学研究』1号から掲載されている長寿ページ「海外雑誌論文目録」なのである。語研の語学関係海外雑誌の収蔵が群を抜いているという万人の注目により、有志の会員が毎年暮れに司書の協力を得て続行して来た作業であった。

思えば、38年前、いまは亡き理工学部河村正夫教授がひとり語研図書室の片隅に雑誌束を積み重ね、かたわらで奮闘しておられた事を思い出す。学外から獨協大の木下光一教授（当時一文非常勤講師）が来校、若手教員をリードし、しだいに作業も形をなしてきた。80年、90年代は急速に外国で博士号を得た俊英たちが増加し自分たちの研究上必要に駆られ、また学界全体の研究レベル向上を目指し、この作業は有用不可欠なものになっていった。

以前作業には7、8名で6時間を要したが、最近パソコン作業で効率化し同人数でも4時間に短縮された。一方前年度分ということで本庄分館から取り寄せたり、在架分で製本に出されるのを待ってもらったり図書館側の協力や了解を仰ぐ事も必要になった。

更に昨今は大阪大、京都大、筑波大に属する会員が目録作業の分担をしてくれ、早大での拾うべき雑誌の種類が軽減されたという事情もある。

私は1967年語研に着任して以来、微力ながらこの作業の世話をしてきたが、何と云っても語研図書室の収蔵誌の種類が豊かであることに秘かな自負を覚えて来た。「オタクにはほんとうに海外から多く雑誌を集めておられ感心しますよ」という声を寄せられたのも一再ではなかった。そしてこの“宝の山”も内外に情報開示されはじめて機能するものだから、われわれの地道な作業は欠かせない

ものだったのである。

それにしてもこの豊富な収集にはルーツがあった。1959年語学教育研究室発足当時、助手であった菅田茂昭氏（イタリア語、現在名誉教授）が購入雑誌リストを作成、室長の川本茂雄氏（一文、名誉教授、故人）とともに選定、さらに中国語関係は安藤彦太郎氏（政経、名誉教授）、古典語は古川晴風氏（元図書館長、故人）ほかにも諸言語教員の支えを得て収蔵誌コーパスを拡大して行ったのである。菅田氏は当時を回顧して「留学先として訪れたフィレンツェ大学で言語学誌の完備しているのに一驚し、帰国したら語研でも負けずに充実させようと奮起した。」と私に語ったことがある。さらにまた付け加えるならば、いったん購入を決めた雑誌は予算を削らず維持し、新着誌へも予算を与える措置を続けてきた事も大きいと言えるだろう。その結果、近着誌の雑誌目録作成という本題からはそれるが、主要誌のバックナンバー補充とか、貴重な雑誌の買い付けについても語研には各学部の語学教員で構成される図書委員会が置かれたので、タイミングよく購入決定がはかられたのであった。世界に知れた雑誌論文目録“Linguistic Bibliography”（Kluwer Academic Publishers）に比べると、収録範囲がフランス語学に限られるという弱点はあるものの、LBは4年前の分が収録刊行されるのに対し、われわれの目録作業は1年遅れでフォローしている点は誇ってもよく、この学会誌の購読者であるパリ在住のフランス人学者も調法していると言ってくれた事があった。

2001年に退職した私は図書館利用に何の支障もなく、いつもありがたく思っているが、学内外の若い研究のためにもこの目録作成作業に今後末長く役立ちたいと願っている。

例・『フランス語学研究』第39号（2005）より

Bulletin de la Société de Linguistique de Paris
98-1 ('03)

DEPECKER, L., Saussure et le concept, 53-100

SCHNEDECKER, C., Quelques-uns 'partitif' : approche sémantico-référentielle, 197-227.

BERTHELOT-GUIET, K., Nom de marque et perception 'fautive' du discours publicitaire, 229-245.

西洋社会科学古典資料講習会に参加して

本 木 洋 子（資料管理課）

1. はじめに

11月8日から4日間、一橋大学社会科学古典資料センター主催の「西洋社会科学古典資料講習会」に参加した。今年で25回目を迎え、早稲田大学図書館からも毎年のように受講生を送っている。今回の受講生は32名。北は東北、南は九州と全国から参加者があった。

この講習会は、図書館員、西洋社会科学の研究者を対象とし、西洋書誌学、西洋社会科学古典資料の保存・管理、西洋社会科学古典研究を3本柱としている。

2. 講習内容

日常業務の中では、新刊本を扱うことが多いが、今回のテーマは古典資料である。講義は、有難いことに初心者向けのものが多かった。原稿が出来上がってから出版されるまでの工程をスライドを使いながら進められ、更に、折り丁やウォーターマークについては、見本が配られ、わかりやすく説明があった。同時期に出版された本でも、それが出来上がるまでに、本文の異同が生じることがあり、そこに著者・出版社の何かしらの意図がある。だからこそ、オリジナルの図書、版違いの図書を持つことが重要であることを学んだ。

保存・修復の講義では、劣化の様々な要因（酸性紙のように紙自身に内在する要因と、虫・カビ・紫外線など環境に依存する劣化要因がある）とその対策について伺った。対策の中では薬剤を使用せず、環境にやさしい低温殺虫処理がお奨め

とのことである。

3. 社会科学古典資料センター見学

一橋大学図書館のすぐ横に社会科学古典資料センターがある。センターは1978年に附属図書館より分離され、貴重書図書館として独立した。ここでは、貴重書の収集から研究・整理・保存・閲覧までを集中管理している。蔵書数は7万冊。建物に入ってすぐに閲覧室・事務室があり、奥に貴重書庫と保存修復工房がある。

当日は、受講生のために、講義で使用された資料を展示してくださり、講義中の内容を実際に手にとって確認することができた。また、貴重書庫にも入ることが許され、保存のためにセンターがどのような工夫をしているのかの説明を受けた。それらは小さな工夫の積み重ねであるが、センター職員の方々の、保存に関する意識の高さを感じることができた。保存修復工房では、革装の手入れ方法・保存箱・封筒ホルダーの作成を見学した。工房には便利な設備が整っており、専門家の指導の下、少人数であるが効率よく作業が進められている。こちらでは、修復前に図書の状態（製本や中身の構造、材料、劣化状態）を調査票に記入・データ入力をしており、体系的な保存作業を行っているのに驚かされた。

4. おわりに

一橋大学は国立の文教地区にあり、緑豊かな場所である。今回、講習会の会場となった「佐野書

院」は初代学長の元私邸を改築した建物で、窓からの木々の眺めも素晴らしかった。そのような環境の中で、4日間も(端末ではなく)資料とじっくりと向かい合うことができ、感謝している。

第25回 西洋社会科学古典資料講習会 時間割

		第1時限 (9:40-11:30)	第2時限 (13:00-14:50)	第3時限 (15:10-17:00)
1日目 (11/8)	オリエンテーション	書誌学 (I) 記述書誌を“読む”面白さ 武者小路信和 (大東文化大学助教授)	書誌学 (I) 記述書誌を“読む”面白さ 武者小路信和 (大東文化大学助教授)	保存・修復 (I) 紙資料の保存 増田勝彦 (昭和女子大学大学院教授)
2日目 (11/9)	附属図書館見学	書誌学 (II) 啓蒙の「書物学」 岩本吉弘 (福島大学教授)	保存・修復 (II) 製本の病理と書籍の保存 岡本幸治 (製本家・書籍修復家)	社会科学古典資料センター見学 書庫・貴重書保存修復工房ほか
3日目 (11/10)		書誌学 (III) 社会科学古典資料センターの 古版本目録作成について 松尾恵子 (一橋大学助手)	古典研究 (I) ルソーとモンテスキュー 山崎耕一 (一橋大学教授)	書誌学 (IV) 15世紀西洋活版印刷本イン キュナブラの手ほどき 雪嶋宏一 (早稲田大学図書館司書)
4日目 (11/11)		古典研究 (II) オットー・フォン・ギールケ のゲルマン法思想と自然法思想 原敷二郎 (一橋大学大学院助教授)	古典研究 (III) 歴史学派とマーシャル (歴史学 派からみたマーシャル) 西沢保 (一橋大学教授)	終了式

中国語図書WINEデータ入力現状

高木 理久夫（資料管理課）

1．2001年～2005年までの進捗状況

2001年10月より、新規受入中国語図書のWINE書誌データ作成を開始した。それと併行して書架に配架済みの中国語図書についても、その書誌データを遡及入力していく作業も始めた。当初、データ入力作業は、図書館利用者用の端末機の文字コード環境が整っていなかったため、未だ試験入力の段階であった。Unicode対応のWINEシステム構築のため、この当時学術情報課は日夜、試行錯誤を繰り返していた。

2003年11月、蔵書検索において「多言語版WINE」が正式に公開され、中国語、ハングル等、日本語のコンピュータ環境において、いわゆる特殊文字を有する書誌データを利用者が検索する環境が整った。入力データはそのままWINE OPAC上に反映されるようになり、入力作業から「試験」という文字がなくなった。

2004年4月より、新規受入分中国語図書について、中央図書館の委託を請け、紀伊屋書店がWINE書誌データの作成を開始した。これで入力体制が整った。『ふみくら』第70号（2003.1）に記しておいた課題が一応クリアされた。

2005年4月、図書館開館以来、続けられてきたカード目録作成を停止する。中国語図書の目録データは、今後WINEで維持されることとなる。

2．入力データの現状と今後の遡及入力について

2005年10月までにWINEに入力された中央図書館所蔵中国語図書データ数は、次のとおりである。

書誌件数 38,900件
（2002年10月時点 = 5,842件）
図書冊数 105,108冊
（2002年10月時点 = 10,276冊）

さらに、中央館所蔵の中国語雑誌約1,000タイトルの入力完了している。

現在、中央館地下1階研究書庫に配架されてい

る旧分類中国語図書（イ、ロ、ハ・・・の請求番号がついているもの）の遡及入力を推進しており、入力が完了した分類部分は次のとおりである。

ロ（哲学）、ハ（宗教）、ホ（語学）、ヘ（文学）、ト（教育）、チ（芸術）、リ（歴史）、ヌ（伝記）、ル（地理）、ヲ（社会）、カ（政治）、ヨ（経済）、タ（財政）、ツ（交通）

残りは、イ（総類）他であり、よって2005年10月末現在、中国語図書に関して未入力データ図書冊数は残り約1万2千冊あまりとなった。

予定としては、地下1階旧分類部分については2006年6月をめどに遡及入力を完了させる。さらに引き続き、下記のスケジュールで中央館中国語図書の遡及入力を進行させるつもりである。

- （1）レファレンス図書コーナー配架中国語図書
- （2）旧語学教育研究所移管本中の中国語図書
- （3）入江、福島、澤田文庫等の中国語図書
- （4）新分類中国語図書で未入力のもの

3．WINEで検索する際の留意点

中国語図書を検索する場合、「多言語版WINE」の利用を推奨している。これにより中国語表記が画面上にほぼ正確に表示される。しかし、検索等に次のようなことを留意する必要がある。

（1）ピン音検索について

WINEで中国語図書を検索する場合、漢字とピン音両方で検索できる。ピン音検索の場合、固有名詞等は、スペースを空けずに検索語を入力する。

例1）書名検索で「日本文化入門」と入力する場合

- riben wen hua ru men
- × ri ben wen hua ru men

例2）「中華人民共和国」、「中華民国」

- zhonghua renmin gongheguo
- × zhong hua ren min gong he guo
- zhonghua minguo
- × zhong hua min guo

例3)「毛沢東」(人名の場合)

- mao zedong * 姓と名の間にスペースを入れる。
- × mao ze dong, maozedong

(2) 著者名漢字検索について

著者名検索において、漢字で検索する場合、姓と名の間にスペースを入れない。

例4)「毛沢東」と入力する場合

- 毛沢東 × 毛 沢東

ただし、これは中国語図書の検索の場合であって、日本語図書の著者名漢字検索の場合は、姓と名の間にスペースを入れる。

(3) 文字コードの不統合について

「多言語版WINE」はUnicode (UTF-8)対応になっており、複数の言語コードを統一的に縦覧することができるになっている。すなわちGB、BIG 5、Shift-JIS、それぞれ字形がちがっても表示意味が同じものは、簡体字、繁体字、当用漢字で検索しても、原則として同じ検索結果が、得られるはずである。しかし、どういうわけかその原則が適用されていない文字が、ままする。たとえば、「台」と「臺」、「勞」と「勞」は、同じ文字とは認識されておらず、「台湾」と「臺灣」、「労働」と「劳动」では検索結果が違ってきてしまう。

このような齟齬を防ぐためには、中国語図書を検索していて求める図書が見つからない場合、漢字検索ばかりでなく、ピン音検索も利用していた

だきたい。また、できればお手持ちのパソコンに中国語ワープロソフトを搭載し、中国語の文字入力環境を整えていただければ、漢字の不統合に対処できるかと思う。未だ完全な文字統合システムではないということをご了解いただきたい。

(4) 大部の叢書類について

『四庫全書』、『統修四庫全書』、『四庫全書存目叢書』、『叢書集成』、『百部叢書』等、大部の叢書類については、何千、何万にもおよぶ膨大な収載書について、その一つひとつの書誌を作成していない。現在の中央図書館の目録作成体制では、時間と労力があまりにかかりすぎるためである。それぞれの叢書の目録を利用していただきたい。

4. 今後の展望

中国語図書の遡及入力を開始した当初、データ入力作業に未だ習熟していなかったため、完了までには最低でも10年のはかかるだろうと悲壮な覚悟をしていた。しかし、システムの特徴を把握するにつれ、効率的に入力作業をおこなうことが可能となり、現在では月平均1千冊ペースで入力をこなしている。何事もなく、このまま順調に作業が進めば、2006年10月頃には、遡及入力作業はほぼ完了するだろう。

未だ文字コードに関しては問題があるが、これからの技術の進化が解決を促していくことと思う。

[図]

多言語版WINEにおいて書名「零陵県志」と入力した場合の検索結果。『ふみくら』70号7頁(2003年1月発行)の画面と比較していただきたい。

Record: Entry Next		
タイトル	Lingling xian zhi / Hunan sheng Yongzhou, Lengshuitan shi di fang zhi bian he bian yuan wei yuan hui bian. 零陵県志 / 湖南省永州、冷水滩市地方志编纂委员会编.	
出版事項	Beijing : Zhongguo she hui chubanshe : Xin hua shu dian Beijing fa xing suo jing xiao, 1992. 北京 : 中国社会科学出版社 : 新华书店北京发行所经销, 1992.	
配架場所	請求記号	現況
中央 国語図書	E292.2.00082 60	利用可能
版次	第1版.	
形態	3, 6, 32, 718 p., (21) p. of plates : col. ill., folded map : 27 cm.	
科名	Lingling Xian (China) -- History -- 19th century. 零陵縣(China) -- History -- 20th century. 零陵縣(China) -- History -- 19th century. Lingling Xian (China) -- History -- 20th century.	
分類	292.226 xjz/9 DS783.L5285 L55 1992	
別著者等	Hunan sheng Yongzhou, Lengshuitan shi di fang zhi bian he bian yuan wei yuan hui. 湖南省永州、冷水滩市地方志编纂委员会.	
ISBN	7300084139	

2005年度 中央図書館オリエンテーション報告

オリエンテーション部会

現在中央図書館では、各課1名（資料管理課は2名）の部員と部会長からなるオリエンテーション部会が企画し、利用者向けの講習会を開催している。今年度の活動について報告する。

[2005年度春中央図書館オリエンテーション]

新入生向けの春のオリエンテーションは、2004年度からツアー方式ではなく、AVホールで全体説明を行い、終了後図書館内を自由に見学してもらう形式としている。説明は約20分間でホームページの紹介、WINEの説明、「図書館NAVI」*を用いた館内案内を行い、館内見学では事前に館内案内図を配布し、ポイント地点に説明文を掲示した。4月4日から8日の5日間で合計20回開催した。参加者数は、2002年度以降の状況も含めて以下の表1のとおりである。全体説明方式に変更したことにより、増加傾向の参加者に職員の負担を軽減しながら対応できている。

表1 春オリエンテーション参加者数推移

		2002	2003	2004	2005
参加者数	日本語	711	814	1460	943
	英語	139	16	41	23
協力館員数(のべ)		105	99	51	39

[2005年度春情報検索講習会]

情報検索講習会は、5月17日から19日の3日間にかけて、表2のとりの6種類の内容を1回40分で行った。AVホールを会場として、画面上で実際に検索のデモンストレーションを行う形式とした。時間が限られているため、検索方法の詳細な説明よりもデータベースの紹介に重点をおく形となった。

[2005年度秋中央図書館オリエンテーション]

春と同様の形式で、9月27日、28日の2日間で日本語・英語各2回ずつ開催した。参加者数は表3のとおりで、英語の回が著しく増加した。国際教養

学部等9月入学の増大や留学生の増加によるものではないと思われる。

表2 情報検索講習会参加者数(春・秋)

内容	参加者数 (開催回数)	
	春	秋
WINE入門	50(3回)	14(2回)
WINE 以外で図書検索	47(3回)	13(2回)
国内雑誌	57(3回)	23(2回)
海外雑誌	49(2回)	22(2回)
新聞・ニュース	30(2回)	14(2回)
インターネットで情報検索	46(2回)	23(2回)

表3 秋オリエンテーション参加者数推移

		2002	2003	2004	2005
参加者数	日本語	81	61	75	97
	英語	43	62	77	179
協力館員数(のべ)		22	20	10	12

[2005年度秋情報検索講習会]

内容は春と同様の6種類で、10月12日から14日の3日間にわたって計12回開催した。参加者数は表2のとおりで、春と比較すると少なかった。

新入生向けのオリエンテーションを企画する際には、入学後の日程を勘案した設定に留意している。その結果が参加者数の増減にも影響しているものと思われる。

しかし情報検索講習会は、年間2度の講習会の開催では潜在するニーズに十分に対応できていないと思われる。今後は、必要な時にすぐにWeb上で閲覧することができる利用ガイドを充実させる等、講習会開催以外の方向性を検討すべきであると考えている。

(文責：笹渕 洋子)

*<http://www.wul.waseda.ac.jp/CLIB/navi/index.html>

2005年度 3 - 11月 展覧会開催報告

展 示 部 会

「早稲田大学図書館 新収資料展 - 最近の寄贈資料から - 」

2005年3月24日～4月20日 展示室

近年、早稲田大学図書館に寄贈された資料のうち、ウィリアム・モリス最晩年の傑作『チョーサー作品集』（大竹正次氏寄贈）、庵原謙（いはら・しずか）氏蒐集中国文様コレクションほか、おもだった貴重なものを一堂に集め展示した。会場には、詩人・吉田一穂の貴重な資料を寄贈された一穂の子息・



庵原謙氏蒐集中国文様コレクションから（未整理）

穂の子息・八峯氏（元館員）ご夫妻も見えられた。

「江戸・明治幻景 - 図書館蔵古写真展」

2005年6月25日～7月10日 本庄市 早稲田リサーチパークコミュニティセンター情報資料室

幕末から明治初年に撮影された黎明期の写真にのこる日本の古い風俗を展示。2003年1月に図書館



金閣寺「ファーサリ写真帖」より HD-1955

で実施したもののリメイク。6月25日（土）、平木収芸術学校客員教授によるオープニング講演「黎明期の写真術」が行われた。

「幕末・明治の広告メディア展 ～ 広告にみる当時の庶民性」

2005年6月25日～7月10日 磐田市立図書館

「早稲田フェスタ遠州」協賛企画。西垣文庫の引札、ポスター、看板などを出品。遠州稲門会などの共催。

「早稲田大学芸術功労者 丹羽文雄 追悼企画 丹羽文雄 ——人と文学」

2005年7月8日～18日 小野梓記念館ワセダギャラリー

2005年4月に100歳で長逝された稲門出身の作家・丹羽文雄氏を偲び、新築成った小野梓記念講堂にて「リレートーク」が7月8日に開催されるのに合わせ、稲門ライブラリーに生前丹羽氏から寄贈された資料を中心に丹羽氏の作家としての歩みを展示。長編『四季の旋律』原稿や、演劇博物館所蔵の丹羽氏原作映画のポスターなどが注目された。同時に、今年よりフリーペーパーとなった雑誌「早稲田文学」の歩みを小展示として飾り、今年急逝された平岡篤頼名誉教授の絶筆原稿も展示した。

「幕末・明治の異文化交流 日本人が見た外国人・外国人が見た日本人」

2005年10月18日～11月12日 展示室

ペリー来航がもたらした幕末の政治的緊張・混乱は、庶民のレベルにおいては、まだ見たことのない外国の文化や外国人そのものへのあくなき好奇心としてひろがり、開国と文明開化への素地をつくった。本展覧会はわが国における西洋文化受容の発端となった蘭学のはじまりから、外国人のようすを庶民に伝えた横浜浮世絵、ワーグマンやビゴーなど外国人の目にうつった日本のイメージ



ペリー提督肖像「金海奇観」より 文庫8-A230

などを示すヴィジュアル資料を時系列的に展示した。学生を中心に受験生、他機関の研究者など多くの観覧者があった。

（文責：松下 真也）

最近の整理資料から

特 別 資 料 室

特別資料室で最近整理を完了した資料から、まとまったコレクションになっている五種の資料を紹介する。

金子馬治関係資料（又6 - 9304）

金子馬治（筑水、1870 - 1937）は坪内逍遙の薫陶を受けた東京専門学校文学部の第一期生であり、早稲田文科初期の代表的人物の一人であった。卒業論文が「早稲田文学」に掲載されたのをきっかけに、文学・哲学関係の論文・評論を陸続と発表した。金子は早稲田大学文学部の初代学部長であり、坪内逍遙記念演劇博物館の初代館長もつとめた。

本資料は、金子が東京専門学校の第一回海外留学生としてドイツに派遣されライプツヒ大学を卒業した時の分をはじめ、金子馬治の経歴を充分知ることができるもので、原稿・書簡・著作・手沢本などで構成されている。とりわけ「一代女に於ける井原西鶴の理想」や「芸術の価値」といった「延葛集」「早稲田文学」の原稿など、初期の活躍を如実に示す多くの原資料を含んでいて貴重である。また、書簡は草創期の学苑の様子を知る上で欠かせないものとなっている。



金子馬治原稿

本資料は金子馬治令孫山田治子氏より寄贈を受けたものである。目録は「金子馬治（筑水）関係資料目録」。全175点。

漆山天童旧蔵資料（イ4 - 3159）

漆山天童（又四郎、1873 - 1948）は山形県出身の漢学者、国文学者、書誌学者として知られた。『陶淵明集』や『杜詩』『唐詩選』『三体詩』など多くの漢詩文の訳注を手がけ、幸田露伴の弟子として『露伴全集』の編集に従事した。書誌学では『新撰浮世絵年表』はじめ絵本、絵入本の分野で功績があった。

本資料は天童の自筆稿本・写本・刊本・書画・書簡・写真などで構成されており、漆山天童の全業績を展望できるもので、その業績の多彩さ、能筆ぶりが知られる。中には小説『舟中物語』原稿や「木版挿絵本年代順目録」「挿絵本芝居台帳音順目録」「黒本目録」「小説年表原稿カード」など多数の目録の稿本があり、書簡には幸田露伴、斎藤茂吉差出のものがある。また『春雨物語』など国文学研究に裨益するところの資料が含まれている。



漆山本『春雨物語』

本資料は漆山天童令嬢遠藤文子氏より寄贈を受けたものである。目録は「漆山天童旧蔵資料目録」。全584点。

小倉金之助伝記資料 (イ16 - 1276)

数学者小倉金之助(1885 - 1962)の旧蔵書は博士のご好意で、その生前に早稲田大学図書館蔵に帰し、「小倉文庫」として整理された。とりわけ、『塵劫記』などの和算書の貴重なコレクションについては、つとに知られているところである。

今回あらたに加えられた資料は、書簡・葉書・文書類が主なものである。山形県酒田の回漕問屋に生れ、東京帝国大学選科に入学したが中退。東北帝国大学助手から大阪医科大学予科教授、フランス留学、東京物理学校理事長、第二次世界大戦後日本科学史学会を創立し、民主主義科学者協会会長をつとめるといった経歴をたどった、小倉博士の生涯がわかる伝記的資料というべきものである。これらは小倉金之助の著作『数学者の回想』(昭和25年4月刊)の内容を彷彿させる資料群である。書簡は学位授与や『日本の数学』刊行時のものが多い。中には、三木清、三枝博音、羽仁五郎、三上義夫、山田盛太郎、戸坂潤、田辺元、桑木或雄といった人々差出の書簡が含まれている。

本資料は小倉金之助令孫小倉欣一文学部教授より寄贈を受けたものである。目録は「小倉金之助伝記資料目録」全470点。

本間久雄文庫補遺資料 (文庫14)

本学名誉教授本間久雄(1886 - 1981)の旧蔵資料は、その生前に早稲田大学図書館蔵に帰し、「本間久雄文庫」として整理、活用されている。同文庫は明治大正文学に係わる優れたコレクションで、750点を超える自筆稿本類を含み、つとに近代文学研究者から高い評価を得ている。

今回の資料は「本間久雄文庫」を補完する資料であり、補遺として加えるものである。内容はほとんどが近代作家の書簡である。「早稲田文学」の編集をまかされた本間久雄に宛てた坪内逍遙の細やかな心遣いが伝わる170通を超える書簡をはじめ、仲間内の気楽さからユーモラスな渾名の登場する硯友社時代の巖谷小波書簡、須藤南翠が三品蘭溪に出した明治の作家の生活事情がひしひしと伝わる書簡を含む三品蘭溪宛諸家書簡、他に高橋太華、宮崎三味差出の多い森田思軒宛諸家書簡など全307点である。

本資料は本間久雄令嬢高津久美子氏より寄贈を

受けたものである。目録は「本間久雄文庫目録補遺」

桑木或雄関係資料 (ヌ6 - 9305)

物理学者桑木或雄(1878 - 1945)は明治29年に東京帝国大学に入学し、長岡半太郎、田中館愛橘などに学び、後に九州帝国大学教授、旧制松本高校校長を歴任した。桑木は哲学者として著名な4歳年長の兄巖翼の影響もあって物理学の哲学的問題に関心を持ち、マッハの研究からアインシュタインの特殊相対性理論に関心を持つに至った。



アインシュタインを迎えた桑木或雄
(前列左から2人目、写真は桑木資料所収のもの)

全2162点に及ぶ本資料は、桑木或雄の生涯や業績を知るのに格好の材料を提供してくれるが、とくに1750通を超える書簡群に、桑木の学問上やそれ以外の分野における豊かな人間関係をみることができ、2度にわたる欧米滞在時の絵葉書などに家族への深い愛情を窺うことができる。主な桑木宛書簡の差出人は、長岡半太郎、田中館愛橘、山川健次郎、本多光太郎、新村出、石原純、寺田寅彦、中村清二、大槻如電、田辺元、西田幾多郎、柳田国男、小倉金之助、松井須磨子、島村抱月、マックス・プランク、桑木巖翼などである。

本資料は桑木或雄令孫桑木敏氏より寄贈を受けたものである。目録は「桑木或雄関係資料目録」

(文責：久保尾 俊郎)

新収資料「新選組隊士召喚状」について

高木 理久夫（資料管理課）

【はじめに】

中央図書館は、平成17年10月、静岡県浜松市在住の高木寿樹（たかぎ・ひさき）氏より、新選組に関連する文書を御寄贈いただいた。この文書については、今から29年前、氏の父である高木奨（たかぎ・すすむ）氏（故人）がその存在を初めて世に公表した。昭和52年2月26日付『中日新聞』駿遠版に次のような記事がある。

『京三条へ出頭せよ』

新選組の呼び出し状 水窪町でみつける

泣く子も黙った、といわれる幕末の新選組が当時、人集めのために呼び出しをかけた珍しい書状が、磐田郡水窪町で見つかり、話題を呼んでいる。

同町大里のくつ販売店高木奨さん（五一）方にあったもので、十五センチに三十八センチの横長の和紙。高木さんが、数年前に亡くなった父の書類を整理していて見つけた。

書状には大栗安村（現在の天竜市熊）百姓政平、新切新田（同）百姓弥五右衛門の二人を召し連れて京三条通りの簾（すだれ）屋まで出頭せよ - と書いている。あて名は、遠州豊田郡峰神沢村、名主太郎左衛門で、京都詰新選組御役所名で出されている。名主の家はいまは孫の天竜市熊字峰神沢の農林業小出一二さん。また百姓政平の家は、農林業新木巳佐男さんがいる。

高木さんの調べでは、政平は昔、武士で短穂のヤリの達人だったという。新選組からの書状は、返納せよと示してあるが、どうして残っているのかわからない。政平は、当時、呼び出しに応じて出頭したと伝えられている。

高木さんの話 弥五右衛門についてもこれから調べるつもりだ。ただ、どうして自分の家に書状があるのかよくわからないし、さらに研究してみたい。

文中、「天竜市熊（くんま）」とあるが、水窪町

（みさくぼちょう）と同様、現在は浜松市に併合されている。ちなみに高木奨氏は筆者の伯父であり、子息である寿樹氏は従兄にあたる。

【なぜ書状は水窪に残されたのか】

水窪は信州、三河と境を接する遠州最北の地である。道路が整わず、自動車あまり普及していなかった時代、水窪とその南方にある熊とは水窪川、天竜川沿いにある山の尾根道でつながれていた。現在では自動車で一時間半ほどで行けるが、昔は一日がかりであった。

奨氏の弟である高木勝（筆者の父）によれば、奨氏は熊に調査に行った時、「地元の人から江戸時代末頃、熊からイチバヤ（高木家の屋号）に嫁いだ人がいたということを聞かされた」と生前、語っていたそうである。それが事実だとすれば、本文書も、その女性がイチバヤに伝えたものではないかと考えられる。

さて、この文書には「佛法僧寶」の印が押されている。新選組が発給した文書では、このような印をもちいたものは知られていない。また「新選組御役所」と「御」の字が記されている。差出人が自らに敬称をつけるとはまず考えられない。さらに文中、京都まで持参し返納せよと記してある。伝承を信じれば政平は京都に出頭していった。この文書は本来ならば彼らの故郷に残されていないはずである。おそらく家族や村の者は、二度と帰ってこないかもしれない政平、弥五右衛門の身を案じ、元の文書を写しておいた、そして残されたものが本文書ということになるのではなからうか。なお、政平、弥五右衛門のその後の消息は伝わっていない。

【今後の問題について】

この書状について研究するにあたり最も大きな問題は、他に類似の書状が未だ発見されていない（公表されていない）ことである。これでは比較の仕様がなない。また、年月日が記載されていないこ

とから偽文書ではないかとも考えられるが、そうであったとしても斯様に具体的な人名をあげて偽文書を作成する意図がわからない。さらに文面に記された次のようなことが今後、研究の対象になるだろう。

(一)「新木政平」、「弥五右衛門」について

現在、公刊されている新選組関連の文書、研究書類において、「新木政平」、「弥五右衛門」にあたる人名を見出すことができない。新選組から指名を受けるほどの武芸者であるとすれば、どのような繋がりが近藤勇等とあったのだろうか。

(二)「京三條通簾屋」について

具体的に京都のどの地点にあったのか、現時点では特定できていない。

(三)「佛法僧賣」印について

前述したように新選組が発給した文書でこのような印が押されているものは管見では見出されない。本文書を写しと考える所以である。この書状が高木家にもたらされた由縁を筆者は記してみたが、想像の域を出るものではない。この文書がもたらされた経緯をさらに詳しく調査してみる必要があるだろう。

今後、幕末史、新選組研究家および郷土史研究家等の皆様の方に、さらなるご検証を賜わること希望する次第である。

なお印字の解読、拙文の記述について、資料管理課職員である藤原秀之氏に多大なお力添えをいただいた。ここに謝辞を記しておきたい。

(2005年11月記)



大栗安村
百姓
政平
新切新田
百姓
弥五右衛門
右之者江達儀有
之条候京三條通簾屋迄
召連此状披見次第
罷越可相届其節
此書付可相返もの也
京都詰新選組
御役所
(墨方印「佛法僧賣」)
遠州豊田郡
峰神澤村
名主
太郎左衛門江



図書館だより

定年退職を迎える専任教職員のみなさまへ

図書館の利用について

ご退職後も引き続き早稲田大学図書館、各キャンパス図書館をご利用いただけます。

中央図書館2階のインフォメーションカウンターでお手続き下さい。その際勤続年数の確認をさせていただきます。

利用カードのお渡しはご退職後（教職員証ご返却後）となります。カードをお渡し時に教職員証をお持ちでしたら人事課までご返却下さい。返却は図書館インフォメーションカウンターでも承ります。利用の詳細についてはリーフレット「図書館カード利用上のご注意」でご案内いたします。

* 名誉教授証交付予定の方は、名誉教授証発行までの暫定利用カードを発行致します。名誉教授証の交付後は、暫定利用カードをご返却下さい。（名誉教授証についてのお問合せは人事課までお願いいたします。）（文責：福本 宏子）

お問合せ先：図書館総合閲覧課

03-5286-1659（直通TEL）

図書のご寄贈について

図書館では長年にわたり、ご退職される先生方の収集された図書を受入れています。図書館としては、日々多くの学外諸機関や校友、一般篤志家からの寄贈を受け入れており、今後とも良い資料を随時受入れてまいりたいと考えています。

ご寄贈図書の受入れに際しては、以下のような原則を設けています。

原則として、図書館の既蔵の蔵書と重複しないものを図書館蔵書とする。重複図書についてはストックしておき、海外諸機関への寄贈などに充てる。

図書・資料は日々増加していくため、スペースを有効に使う意味から、できるだけ蔵書の重複を避けこれまで図書館に未所蔵のものを受け入れていくという趣旨です。ご寄贈いただいた図書は、WINEで所蔵の有無を調べ、図書館蔵書と重複した図書はストックし、寄贈を希望する海外の図書館等への早稲田大学からの寄贈に充てます。これまで多くの国々の機関に重複図書を寄贈しています。

またそのような諸機関への送料等に充てることなどを目的として、重複図書の一部をABAJ（日本古書籍商協会）を通して古書市場に提供しています。

図書・資料は、それを必要とする人のいるところに運ばれ有効活用されるべきであるという観点から海外諸機関への寄贈は今後とも可能な限り進めていく方針です。

ご退職される先生方が、研究室にある図書・資料を整理される場合は、ぜひ図書館にご相談ください。先生方の収集された図書は、各々の分野で極めて貴重な資料との認識を持っています。図書館の蔵書を更に向上させるため、ご協力をお待ち致しています。（文責：宇田川 和男）

お問合せ先：図書館資料管理課

03-5286-1657（直通TEL）〔各学部教員図書室経由も可〕

〔表紙写真〕

於鹿鳴館貴婦人慈善会之図 橋本周延画
明治20年（1888）11月

不平等条約改正をはかり、欧化政策を進める明治政府は、明治16年（1883）外国賓客接待のため、東京日比谷に鹿鳴館を建設した。内外の高官と夫人・令嬢たちが日々集う、いわゆる鹿鳴館時時代が現出した。これは高官の夫人連たちが開いた慈善会の絵。参加者には、毛利・鍋島といった元大名、山県、松方などの維新の勲功者たちの夫人が名を連ねている。
「幕末・明治の異文化交流」展から
錦絵3枚続 チ5-4152

所属名は原稿執筆時のもの

❖ 早稲田大学図書館報 ふみくら No. 73 2005 年12月15日発行 3,000部 ❖
❖ 発行人／紙屋敦之 ❖
❖ 担当課長／金子昌嗣 編集委員会／芝田穂・福本宏子 ❖
❖ 発行／早稲田大学図書館 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 ☎5286-1652（ダイヤルイン） ❖

ISSN 0289-8926